
ルール違反

石井至

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ルール違反

【Nコード】
N4983A

【作者名】
石井至

【あらすじ】
阪中円は、剣道部に入部してきた後輩、前嶋由紀に一目惚れ。ところが由紀にはソックリの双子の兄由浅ユアサがいた。見かけによらず剣道が強い由浅にやりがいを感じつつ、由紀にも近づきたい阪中だが、そうは問屋がおろさず…。

第1話 美人入部

4月5日。今日は入学式だ。

といっても俺の入学式ではない。

高校2年生の俺にとって入学式といったら「新入部員の勧誘」だ。入学式が終わる午前10時半を狙って『剣道部』の看板を持って1年生の出待ちをする。

「阪中、かわいい子連れて来いよ！」

現部長、佐々木先輩はそんなことを言っているが、剣道部に入ろうというかわいい子が果たしてどれくらいいるだろうかと思う。

かわいい子を見かけたら、勧誘やめてナンパだ、ナンパ。

ぞろぞろ出てくる新入生に適当に看板を持ち上げてみせる。

実際のところ、高校生になってから剣道を始める奴は少ない。一学年に一人か二人。だいたいは小中学生からやっていて、そのまま続ける奴が多い。だから俺の役割は「ここに剣道部員がいますよ」って示すことだ。

そんなこんなで大してやる気も無くボーッと突っ立っていたら、トントンと背中を叩かれた。

「あの〜、剣道部の部室って、どちらですか？」

振り返ると、綺麗な女の子が立っていた。

「えッ!? 剣道部? あ、もしかして入部希望かな? 経験者?」

突然の出来事に、俺はちょっとあせった。すると、彼女はそんな俺を見て笑った。

「経験者です。今日は稽古されますか?」

「今日は1時から稽古があるよ。見学する?」

「はい。よければ」

うわ〜。ラッキー。めっちゃかわいい!

「部室は道場のそばなんだけど…。一緒に行こうか」

「ありがとうございます」

ニコツとされて、ガーンと衝撃が走る。ひとめぼれって経験無かったけど、今経験したかも…。

本当は、あと少しここで立っていないけりゃいけないが、この際どうでもいいや。彼女に付いて行きたい。

「どこの中学校から来たの？」

一緒に並んで歩く。

「貝掛二中です」

「強いところじゃん」

「そうですね、結構上位常連校でした」

じゃ、彼女も意外と強いのかも。

「それは稽古が楽しみだな」

これは本音。

「あの、私、前嶋由紀つて言います。お名前、伺ってもいいですか？」

「俺は阪中マドカ。マドカは円周率の円ね」

「阪中さん…」

彼女は、ちよつと何か考えているような表情になった。

「…もしかして、去年の秋の県大会で…」

「ん？ああ、三位でした。ははは。詳しいね」

去年の県大会…ちよつと嫌な思い出だ。

「新聞の地方欄に、お名前が載ってました。一年生で準決勝までつて、すごいですよね。それで覚えてたんです」

「そっか。ありがとう」

すごいかも知れないが、決勝まで進めなかった自分に腹が立ってしょうがない。

…けど、まあいいや。前嶋さんが「すごい」って言うてくれたから良しとしよう。

「阪中、やったな！」

佐々木先輩をはじめ、3年生も2年生も、彼女の登場に大喜びだった。

「ダメですよ、由紀ちゃんは俺がツバ付けとききましたから」

前嶋さんを女子部室に連れて行った後、男子部室は大いに盛り上がった。

「かわいいなあ。あれは久々のヒットだなあ」

「でも『前嶋由紀』って、どこかで聞いたような…」

その時、男子部室のドアがガチャッと開いた。

「失礼します。剣道部はこちらですか？」

入ってきたのは…。

「えっ!？」

みんな、固まった。

入ってきたのは、前嶋由紀と同じ顔の…でも詰襟を着た…男？

こちらが固まっているのを見て、彼はにっこり微笑んだ。

「ああ、もう由紀を見たんですね？僕、由紀の兄の由浅です。双子なんです。…入っていいですか？」

「おお、入れ入れ」

我に返った誰かがそう言って『前嶋由浅』を招き入れると、その後ろから、もう一人、大きな奴がぬつと入ってきた。

「失礼します。山之辺総司と申します。入部希望です」

前嶋由浅が身長170cmもなさそうなのに対し、山之辺は180cmぐらいありそうだ。入り口のところどころでちよつと頭をかかめて入ってきた。

ボロボロの男子部室の入り口で、でかいのとチビとが並んで立つている。

…変なコンビ…。

「今日は稽古ありますか？是非見学させてください」

元気いっぱいにそう言う由浅の様子は、まだ中坊のにおいがする。

「経験者なんだろう？見学といわず稽古に参加してよ」

佐々木先輩がそう促したが、

「いえ、今日は道着も防具も持ってきていないんです。見学だけさせていただければ」

由浅はそう言って断った。後ろで山之辺が肯いている。

「いや、稽古は昼から…1時からだよ。貝掛二中だったら家も近いんじゃないの？防具取っておいでよ」

佐々木先輩がそう付け加えると、由浅と山之辺は顔を見合わせ…そして頷き合った。

「はい！ありがとうございます！じゃあ、早速一旦帰ります！」
元気なお返事。一礼して去っていく二人。

そつと閉まったドアを見ながら、残された俺たちは考えていた。

…あのドア、あんなに静かに閉まったっけ。

「あいつら、礼儀正しいな」

「…なんか、さわやかだったな」

「山之辺は、あんまりしゃべらんな」

「それより前嶋…そっくりだな」

「…そっくりだな」

「…そっくり…」

由浅は由紀ちゃんにそっくりだった。

第2話 前嶋兄妹

昼からの稽古には、由紀ちゃんも来ていて俺はウキウキした。

由紀ちゃん制服もかわいいけど、白い道着に黒と赤の防具を着けてまたイイ感じ。かわいらしさにキリツと引き締まった雰囲気加わって、思わず見とれてしまった。

ふと振り返ると、鏡の前で素振りをしている由浅がいる。
ん？！

由浅は紺色の道着を着て、黒にうぐいす色の防具を着けていたが、それがかえって由紀ちゃんよりも肌の白さが引き立つ。

…なんだかなあ…。

男女で似ている双子っていうのは不思議なもんだなあ。

そしてそのそばで由浅を見ている山之辺の様子が、由浅の侍従って感じでちよつと笑えた。

準備体操、素振り、切り返しのウォーミングアップが終わり、稽

古が始まった。由浅が何故か真っ直ぐ俺のところへ走ってきた。

「お願いします！」

一礼する姿は、本当に清々しいものがある。

「お願いします」

俺もそう応えて…お互いに蹲踞して…。

立ち上がり、構えた。

竹刀の切先が触れた瞬間。

ピリツときた。

由浅の目が、さっきまでの素直な中学生の目じゃなくなっている。
驚いた。

まさか…。

まさかと思った、その勘は外れていなかった。

「面！」

突如叫んで飛び込んできたその素早さは、中学生レベルを超えていた。それを竹刀でかわす。

「ッ！」

体当たり。

あの華奢な身体での体当たりとは思えない、こっちの身体がふつとびそうな当たりが俺の腕を痺れさせた。

そこからつばぜり合いが始まる。

…どちらが先に引くか、それとも技を出すか…。

由浅の目の、その奥を探る。

何を考えている？

由浅の目も、俺の心を読もうとしている。

どうする？

…さあ、次はどう来る？

その由浅の目が、視線が少し揺れて…

面か？

そう思った瞬間、

「籠手エ〜！！！」

由浅が引き下がりながら技を繰り出した。間一髪でそれをいなして追いかける。相手の体勢が整わないうちに技を出す。

「面〜！！！」

追いかけて面を狙ったが、見事にかわされた。竹刀を払われ、逆に俺の体勢が崩れる。由浅がすかさずこちらへ踏み込んで3段技を繰り出した。かわして、払って、打ち返す。

夢中になった。

すごいぞコイツ、何者？

ホントに中学生か？

強い、これは強い。

15歳でこれは、まだまだ伸びるぞ。

去年の俺より技がしつかりしてる。

相当稽古を積んでいる。

しかも丁寧さを感じる。

適当な技が一つも無い。あれば、その体勢の崩れに俺はつけこめる。

本気の本気になってた。

体当たりをしたときに、籠手同士がうまくかみ合わず、お互いに体勢が崩れた。

その瞬間を、俺は逃さなかった。

「面ッッ!!!」

いつの間にか、道場は静まり返っていた。その場にいる全員が、俺と由浅の稽古を見ていた。

由浅が、俺の前まで来た。

一礼をした。

「ありがとうございました!」

…いきなり負けるわけにはいかないさ。入ってきたばかりの中坊にな。

俺も一礼をした。

「ありがとうございました」

他の奴が、稽古を再開し始めた。

「今日はありがとうございました」

部室で着替えていると、道着姿の由浅が俺のところに来た。

「お前、いつから剣道やってるんだ?」

俺はそう聞いた。

「はい、3歳からです」

…やっぱり。なんか気合いの入り方が違うと思った。

強いな、とかすごいな、とか、言ってやりたいけどやめた。

「明日も来いよ」

それだけ言った。

それを聞いた由浅は、ぱああっと明るい表情になった。

「はい！ありがとうございます！」

…この素直さ。かわいらしさ。

本当にさっきの奴か？と思うほどだ。

こうして間近で見ると、由紀ちゃんよりもまだひとまわり華奢な感じがする。道着が少しはだけて、白い肌が隙間から覗いている。ハツとなった。

俺はどこを見ているんだ。

「じゃ、じゃあまた明日」

俺はそそくさと荷物をまとめた。

「はい！また明日、よろしくお願いします」

俺の動揺には全く気付かず、由浅は俺から離れた。部室の隅で待っている山之辺の方へ走り寄る。

ふっっ。

やばいやばい。

あんなのアリかよ…。

去年は同じクラスだった高橋と、帰りにマックに寄った。

話題はどうしても前嶋兄妹のことに偏る。

「あいつ、強えな〜」

「…ああ、そうだな」

「由紀ちゃん、かわいいな〜」

「…由紀ちゃんは、かわいいなあ」

由紀ちゃんのことを考えると、ぼわ〜んと素敵な気持ちになる。

黒目が大きくて、サラサラの髪が長くて、顔がちっちゃくて、色が白くて、唇だけ…ちよっと赤くて…。

ん？

由紀ちゃんのことを考えていたら、想像の中の図が途中で由浅に変わった。…あんまり、変わらん…。というか、はだけた胸の白さを思い出す。

剣道長いことやってると、ずっと室内スポーツなもんだから日焼けせずに色が白くなってくる。でも由浅のは、それとはちよつと質が違う感じがした。

「お、いたいた！」

妄想にふけつてしていると、そんな声が聞こえた。佐々木先輩たちが店に入ってくる。

「今日の稽古はすごかったな、阪中」

そう言つて、俺の隣に座つた。

「はい、これ」

渡されたのは『剣道日本』。剣道の専門誌だ。

「なんですか、コレ」

「前嶋由浅。載つてた」

「えっ！」

慌てて『剣道日本』を奪い取り、付箋の貼つてあるページを開く。

「…関東大会で…去年優勝してるじゃないですか…」

中学生の記事で、そんなに大きく取り上げられてはいないものの『前嶋由浅』の名前と小さな写真が掲載されている。

「前嶋兄妹つて、そういえば聞いたことあつたわ。阪中、今日は頑張つたな」

佐々木先輩はそう言いながら、俺の肩をポンポンと叩いた。

「お前が負けてたら面目丸潰れだったよ」

「…佐々木先輩は？」

「時間切れドロ」

俺は大きく深呼吸をした。

面白いことになってきた。

第3話 好意

校舎から剣道場までは少し歩く。

稽古の前に竹刀のチェックをしようと少し急いで歩いていたら、由紀ちゃんを見つけた。

「あ、由紀ちゃん！」

突然名前を呼ばれた由紀ちゃんは、ちょっとビックリしている。

「ごめんごめん、「前嶋」だと由浅とごっちゃになるから、みんな君のこと「由紀ちゃん」って呼んでるんだ。…構わないかな」

そう聞くと、彼女はニッコリ笑った。

…かわいいな。
いいな。

かわいい笑顔に、すっかり稽古のことや竹刀のことを忘れてしま
いそう…。

「由紀ちゃんさ、今度俺とお茶でも…」

つつい誘おうなんて考えたんだが、…横槍が入った。

「コラッッ！！！」

佐々木先輩が走ってくる。

「離れる離れる！」

そう叫びながら、俺と由紀ちゃんの間割って入ってきた。

「こいつ、剣道は強いけど、私生活はめっちゃくちゃだから近づかん
ほうがいいぞ」

などと、無茶苦茶なことを言う。

「何を言うんですか、人聞きの悪い！」

「俺は聞いているぞ、先週バレー部のコ泣かしたそうじゃないか」

「泣かしてません！断ったら泣いたんです！」

「ほれ見る泣かした」

くっそ、なんでそのネタを…。

佐々木先輩って、時々こっちがビックリするようなネタを掴んで

いることがある。他人の話を聞くのは面白いが、自分のこととなると…油断できない。

由紀ちゃんは笑ってる。さっきのお茶の誘いは、流されてしまったようだ。佐々木め！

「僕168cmありますよ！」

部室のドアを開こうとしたら、由浅の怒る声が聞こえてきた。

「うそ…。そんなにないだろう？」

「あります、ホントですよ。なんなら測ってください」

ムキになって主張する声。

「おーっす」

そう言いながら入っていくと、みんなが「おーっす」だの「お疲れ様です」だの、口々に返事をした。俺は仕切りの奥に入っつて自分の竹刀を出し、ささくれ具合をチェックする。ひどいところはカッターで削った。

「お前さ、アレじゃないの？いつも山之辺と一緒にいるから、余計に小さく見えるんじゃないの？」

道端の声。すると、

「…総司！もう一緒に歩くな！」

由浅が山之辺にそう忠告している。

山之辺の声は…聞こえない。反論はしないようだ。

なんなんだろうなあ、このコンビ。

「お、阪中！注文してたツバが届いてるぞ」

高橋の声がした。

「あ、サンキュー」

俺は削った竹刀を軽く磨きながら返事をした。

ツバっていうのは、刀の握り手と刃の間にある金具のことだが、普通剣道の竹刀に使うのはプラスチック製の簡易なものだ。今ま

で紫色のを使っていたが、こないだの試合で注意されたので、試合用に地味な茶色のを注文していた。

「ところで山之辺は身長何cmあるんだ？」

高橋の声が聞こえてきた。

「…182です」

山之辺の声。あんまりしゃべらないけど、こうして声だけ聞いてみるとイイ声だ。

「やっぱり〜。180は超えてると思ってたんだ〜。部屋に入る時、アタマ打たないように気をつけるよ」

「…もう打ちました…」
プツ。

無口で無表情な山之辺が、黙ってアタマをぶつけているところを想像すると笑えるなあ。

仕切りの奥から出て行くと、由浅が着替え始めていた。白い背中にドキツとするのは、顔が由紀ちゃんと似ているからだろう。

…みんななんとも思わないのかな〜。

辺りを見回したが、どうやら意識しているのは俺だけらしい。

男女の双子って不思議…。そう思いながらぼんやり由浅の着替えを見ていたら、誰かの視線を感じた。

山之辺だった。

俺が気付いたのに気付いて、サツと視線を外した。

由浅、由紀ちゃん、山之辺の3人の素振りは似ている。たぶん同じ道場で習ったのだろう。

素振りは、意外と個性が出るものだ。

でも、3人の素振りは、素直で、クセがなくて、きれいだ。身体が柔らかいことも大事だ。

特に由浅の素振りが一番しなやかで伸びがある。

そういえば、こないだの稽古のときも感じたっけ。

…お互いの間合いが少し離れていても、由浅の技は踏み込み無しで俺に届いた。そう…特にあの、最初の一撃。由浅の身体の大きさで、まさかあの位置から技が出るとは思わなかった。

背の小さいことはハンデだが、それを補う身体能力が由浅にはある。天性のものか、鍛えた成果か…。

また、山之辺と目が合った。

今度は、山之辺は視線をそらさず、こちらを真っ直ぐ見据えたままだった。

第4話 山之辺総司

やっぱり…。

素振りの後の打ち込み稽古を終えると、山之辺が俺の前にやってきた。

「お願いします」

そう言われて俺も「お願いします」の言葉を返す。

構える。

由浅に感じたほどの緊張感はない。

というより、これが普通の中高生だと思う。

…由浅がおかしいのだ。

それにしても…やっぱりデカい。俺は177cmだから…差は5cmか。5cmの差は大きい。多分まともに試合したら、面が決まらない可能性が高い。

技が一本として成立するには、竹刀が当たる角度も大きく影響する。身長差があればあるほど、面は決まり技になりにくい。

コテを狙うか、それとも山之辺の体勢を崩して面を狙うか。

間合いを、普段より少し離れた。身体が大きいということは、それだけ遠くから技が出る可能性が高いからだ。

とりあえず相手の出方を待った。わざと少し手首の力を抜いて山之辺を誘い込む。

「…コテエツ！」

誘われた山之辺がコテを狙って飛び込んできた。

それを払って、技を返す。

「面ッッ！！！」

…やっぱり、身長差の分で決まらなかった。

間合いを切る。

構えて…。

何が何でも面を奪ってやる。

そんな気持ちで湧いてくる。

相手はこないだまで中学生だったんだぞ、と思いながらも、なんとなく漂う挑戦的な態度に乗せられる。

「コテツ！面！面ツツ！！！」

連続技で山之辺を追い込みながら、体勢を崩れさせていく。

山之辺が必死でこちらの攻めをかわしていく。

つばぜり合いから…。

……。

さあ、どうする！？山之辺！

お前が稽古をつけてくれと来たんだろ！？

お前が挑発してきたんだろ！？

さあ、俺を負かしてみろ！！！！

「コテエエエエツ！！！！」

「ツツシャアツ！！！！」

山之辺のコテを払い落とし、追いかけて技を出す。

「面ツツツ！！！！」

くそっ！届かねえッ！

もっと奴の体勢を崩さねば…。

今のタイミングでコテなら決まっていただろう。でも今日の俺は面に固執した。

高いところから出てくる技をかわし、払い、いなして返し技を繰り出す。

目標がある稽古は面白い。

面白いぞ、これは…。

練習後、顔を洗っていたら、声をかけられた。

「阪中先輩は、どうして胴を打たれないのですか」
山之辺だ。

「胴は、試合の時なかなか一本と認めてもらえないからキライなんだよ」

率直に答えると、山之辺は少し微笑んだように見えた。

「先輩は強い…由浅はずっと先輩に会いたがっっていたんです」

…そうなのか？

ちよつと不思議に思っつて山之辺を見た。山之辺は真面目な顔でこちらを見ていた。

「昨年の秋の大会、阪中先輩が決勝に進んだ方が面白い試合になったのに、と言っつていました」

…見に来てたのか？

「はい。由浅と僕とで」

…こいつら、めっちゃめっちゃ剣道が好きなんだな…。

「ははは、恥ずかしい試合を見られたなあ」

俺はちよつと茶化した。あの日の試合は、あまり見せられたものではなかった。

「いいえ。準決勝の清原さんの剣道は、ちよつとずるかったと僕も思います」

清原というのは、準決勝で俺を負かした相手だ。

「…いいよ、負けは負けだから。次は勝つさ」

あんまり思い出したくなくて、俺は笑っつて歩き出した。その俺の背中に向かっつて、山之辺は思わぬ一言を放つた。

「それでも、阪中先輩の由浅を見る目は信用できません」

俺は振り返つた。

「何ソレ。…どつという意味だ？」

ムツとして、俺は聞いた。

「どつもこつも、そのままの意味です」

山之辺もひるまず、俺を見下ろしている。稽古のときよりも気迫を感じさせた。

「…わからんな」

正直、ちよつとビビつたが、俺は先輩としての面子を潰さないよ

う、用心しながら答えた。

「…わからなければ、別にいいです。すみませんでした」

山之辺はそう言って俺に小さく礼をした。

「また稽古つけてください。お願いします」

そう付け足して、奴はその場を離れていった。

山之辺から、今日は面を奪うことはできなかった。

あの身長差を克服するには、もう少しかかりそうだ。でも、それがいい稽古になる。

山之辺も、やはり弱くはない。この前由浅と稽古していなかったら、油断して負けていたかもしれない。

それにしても…。

今日は確かに着替えをしている由浅を、無意識にぼんやり見ていたし、素振りの時も「いい素振りだ」と思ったから見ていた。それをあんなふうに言われるとは…。

『由浅を見る目は信用できん』ってことは、やっぱりアレだよな、俺がエロい目で由浅を見てたと誤解されたってことだよな。

そんなこと、思うか？普通。

裏を返せば、山之辺がいつもそういう目で由浅を見ているって事じゃないか？

…まさか、できてるとか…。

あいつら、いつも一緒だよな…。

そうか、できてるのかも知れないな…。

いや、こないだまで中坊だったんだぞ。それはないだろ。まさか。

そんなこんなを、そのまま水場で考え込んでいた。

「阪中先輩！お疲れ様です！お先に失礼します！」

元気な声にハッと顔を上げると、由浅が帰るところだった。

…由紀ちゃんに似ていて、かわいい。挨拶は元気。性格も素直で
よろしい。

しかし、隣にはもちろん山之辺がいて、俺を観察するような目で
見ていた。

「おお、お疲れ」

俺はそう答えた。由浅がニツコリと笑い…。

山之辺と、目が合った。

俺は山之辺を睨んだ。

山之辺は、静かな表情で、何もなかったように俺に小さく礼をし
た。

第5話 核心

あれは、なんなんだろうなあ…。

山之辺の妙な発言と態度が気になって、なんとなく落ち着かない。由浅が道着に着替えていたりすると、なんだか自分がそれを変な目で見ているんじゃないかと思ってしまう。

それに加えて由浅と会話しているだけでも、どこかで山之辺がチエックしている気がして、早くその場を立ち去りたい気持ちになる。

…あゝあ、なんかブルーだ。

由浅といえば、話してみたら結構な剣道オタクだった。5年前の全国大会の、決勝のあの技がどうだったなんて話をよく聞く。

俺もそついうのが嫌いじゃないんで、ついつい話に乗ってしまうのだが…。

楽しく話していると、無口な山之辺の視線が鋭く痛い。

…あのねえ、俺はお前とは違うぞ。かわいくても男の由浅には全く興味がないからな！

今度、それを言う機会があったら、そう言い返そうと思う。

そして、由紀ちゃんとも、特に何にもなくて寂しい。

由紀ちゃんは、いつも俺のお茶の誘いを笑ってかわす。

「由紀ちゃん、次の日曜日、暇？」

と、聞いても彼女はニコニコしているだけ。

「由紀ちゃん、今日は帰りにどっか寄らない？」

と、言ってみても、やっぱり笑っているだけなのだ。

…やりがいなし…。

由紀ちゃん、好きな奴いるのかもな…。…もしかしたら、彼氏がいるかも…。

どうしたもんかなあ…。コレって今は剣道に打ち込めってことか？ま、それはそれで楽しいんだけどさ。

「98年の石原5段が準決勝でツバゼリ（注：つばぜり合いの意）から面払いゴテ決めたでしょ！あれはシビレましたよ」

「ああ、あれはカツコよかったよなあ…。でも俺はあの大会だったら3回戦の松前4段の…」

「あッ！コテ面面をかわした後の払い面でしょ〜！」

稽古後の由浅との会話はだいたいこんな感じで、山之辺が心配するよなことはないし、色気もクソもあつたもんじゃない。

「僕ねえ、あの試合のビデオだけ、テープが弱っちゃって、もう見られないんですよ…」

由浅がしょんぼりと言う。

「俺持つてるけど」

そう言うつと「えっ！」と叫んで顔を上げた。

「か、貸してもらえませんか！」

「いいよ。また持つてくるよ」

由浅が感激している。

「僕ねえ、僕くらい剣道の資料集めてる奴いないと思ってたんですよ、阪中先輩に会うまで。…敵わないなあ…」

「なんか自然と集まつたんだよ。由浅みたいにコレクターってわけじゃないし。俺だってお前みたいなのがいるなんてビックリだよ」

そしたら、由浅が思い切ったことを言ってきた。

「先輩、僕一度先輩の家に行つてみたいなあ…」

山之辺の一件で、意識してなくもなかったから、ちょっとこの一言には色気を感じて焦ってしまった。

案の定、部室の隅で山之辺が頭の上に「！」「マークを1000個くらいい出して怒っているのが見える。それが面白くて、つついっOKしてしまった。

「次の日曜、来る？」

「えっ！いいんですか！」

目の端で、怒り狂っている山之辺の姿を見ながら、すごく意地の悪い気持ちになって楽しい。

「由浅だったらいつでもOK」

山之辺を見ながら、わざと由浅の耳元で言っただけだ。

奴がダツシユでこっちへ来た。

わはははは。

殴られそうになったのを、由浅の一喝が止めた。

「総司！」

その一言で、山之辺の動きが止まる。

「…すまん」

山之辺は、そうつぶやくと部室から出て行った。俺と由浅以外の部員は、何が起きたか全く分からずあっけにとられている。

「すみません」

なぜだか由浅が俺に謝った。

「なんでお前が謝るんだ」

俺はちよつと笑って言った。

「俺が山之辺をわざとからかったんだよ」

その言葉に、由浅は驚いたようだった。

「先輩…？」

「山之辺がコツチ見てたから。わざと怒らせたんだ…面白がって」

「先輩…」

由浅が何か言おうとして止めた。

「早くお前ら、お互いに自立しろよ」

そう言っただけなら、由浅は下を向いた。

「阪中、俺ら先に出るから、鍵頼むわ」

なんとなく状況を理解したのか、高橋が気をきかせてそう言った。俺の肩をポンと叩いて出て行くこうとする。もちろん他の部員も引き連れて。

「いいよ、俺らももう帰るから。なあ、由浅」

こんな状況で二人残されても困るので、俺も出て行くことにした。

何の気なしに言ってしまったが、二人の核心を突いたのかもしれない。

…過去に何かあったんだろうか。

いや、それは俺の知ったこっちゃない。自立をするべきなのは確かで、俺は間違ったことは言っていない。それは恐らく高橋も感じただからこそ、茶々を入れずに引き上げようとしたのだろう。

第6話 先輩と後輩

「なんだ、まだ帰らないのか？」

部室の前で、由浅は座ったままだった。

「あの〜…」

由浅が恐る恐る俺を見上げて言った。

「総司、また戻ってくると思うんです。荷物、中にあるし」
俺はため息をついた。

「了解。もう帰れよ。俺が待つてるから」

「あ、いえそんな」

「今日アイツ怒らせたの、俺だしな」

何か言いたげな由浅を立てて帰らせる。

…代わりに俺が部室の前でしゃがんでみた。

「あれ？阪中何してんの？」

声をかけてきたのは女子部員の水原だった。同じ2年生で、去年は同じクラスだった。顔はフツーだけど、髪がキレイな奴。

俺は鍵を見せた。

「一人、戻ってくるの待ってるの」

「あれ？鍵番はタカハシじゃなかったっけ？」

そう言いながら、水原が俺の隣に座る。

「ま、いろいろあるあんのよ」

「ふーん。そうなんだ」

水原が、ニコニコ笑った。髪が揺れて、いい香りがした。

「なんだよ、お前、シャワー浴びたのかよ」

「あたりまえじゃん。あんな臭いまんまで電車乗れないよ。女子はみんなシャワー使ってるよ」

…知らなかった。

「お前、髪キレイだなあ」

なんとなく、髪を一束、持ち上げて匂いを嗅いだ。

「ギャツ！なにすんのよ、阪中のヘンタイ！」

「なんだよ、いいだろ、減るもんじゃなし」

「バカッ！あなたに匂われたら減るわよ！」

とかなんとかやっていたら、女子部員の軍団が現れた。

「あれ？阪中とミズちゃん、そういうことなの？」

「違う違う違う！」

俺と水原の音がハモった。軍団の中に由紀ちゃんもいて、俺はますます焦った。

…神様！由紀ちゃんにだけは誤解されませんように…！

「いや、仲良く否定されちゃってもねえ…」

3年の牧野先輩が楽しそうにからかう。ああ、もうヤメテ…。

「本当に違いますよ！俺は山之辺が帰ってくるの待ってるだけで、

コイツはさっきまたまた通りかかって…」

言い訳したら、由紀ちゃんが反応した。

「…総司…、どこか行ったんですか？」

「えっ！ああ、いや、ちょっと教室に忘れ物したみたいで…」

「…そうですか」

とつさのことで、あまりうまい嘘ではなかったが、その場はそれで収まりそうだった。が、

「じゃあ…お兄ちゃんは？」

「さ、先に帰らせた」

その言葉で、由紀ちゃんかなり不審そうな顔をした。

「お兄ちゃんが…先に…？」

うっ…かわいい由紀ちゃんに瞳を覗き込まれると嘘がつけない感じ…。

「それよりさ、由紀ちゃんいつ俺とお茶してくれるの？」

ナンパで誤魔化してみた。

「えっ！」

由紀ちゃんも、俺が二人きりじゃない時にこんなことを言うとは思っても見なかったのだろう、顔が今までになく赤い。

「ちょっと阪中、今ミズちゃんといい感じだったんではないの!？」
牧野先輩が、竹刀袋に入ったままの竹刀で、俺の頭をカツンと叩いた。

…イッテエ…。

「俺は誰ともいい感じなんかじゃありません! 帰れ帰れ!」

俺が頭を抱えながらそう言うと、牧野先輩は「かわいくない奴!」
ともう一度竹刀で小突いてきた。

女子部員が帰って、更に10分くらいして山之辺が戻ってきた。

「あ…先輩…」

俺が座っているのを見てビックリしたようだった。

「早く荷物取ってこいよ」

俺が部室の鍵を見せると、山之辺は顔を真っ赤にして謝った。

「すいません!」

「いいよいいよ」

山之辺が慌てて荷物をまとめて出てきた。

「待たせてすみませんでした!」

もう一度、俺に深々と頭を下げた。

「由浅が待ってるって言ったけど、帰したぜ」

俺がそう言うと、山之辺の動きが止まった。

「あのさあ、由浅にも言ったんだけどさ、お前ら、もうちょっと離れたほうがいいと思うけどな…余計なお世話と思うだろうけど」

俺はそう言いながら部室に鍵をかけた。

「教官室まで一緒に行くか?」

チラッと山之辺を見ながら誘うと、奴は小さくハイ、と言ってついでに歩いてきた。

一緒に歩くと、余計にでかく感じる…。

横目で山之辺を見ながら、よくも由浅は毎日コイツと一緒にいるもんだなと思った。

「まだ顧問に会ったことないよな」

「はい、お名前だけ：栗林先生でしたよね」

「そうそう、通称クリリンな。4月は忙しくてほとんど稽古に来ないんだ。6月に入ったら地区大会とかもあるから、ちょこちょこ顔出してくれるけどな」

教官室のドアをノックする。

「失礼します」

入っていくと、クリリン一人だけが、パソコンの前で格闘していた。

「おお、阪中、久しぶりだなあ！」

クリリンは、ひよろつとした体型だ。身長は多分俺と同じくらいだが、おそらく体重はかなり少ないだろう。それが今は仕事中でメガネをかけており、更に軟弱な様子に見える。しかし、それでも剣道は6段の腕前なのだ。30歳前で6段というのはなかなか難しいことで、俺は密かに尊敬している。

「顧問なのに『久しぶり』って挨拶はないでしょ。たまには稽古つけてくださいよ」

俺は勝手に室内に入っていく、道場と部室の鍵を、所定の位置に戻した。

「あはは、ゴールデンウィークにミニ合宿あるでしょ。それまで待ってくださいよ」

クリリンが俺の背中に向かって言っている。

「え、それまで来ないつもりですか？あ、そうそう、あのコ今年の新人ですよ」

教官室の入り口付近で直立不動の山之辺を、俺はクリリンに紹介した。

「おっ！おつきなこだねえ！剣道やってたの？」

「はい。山之辺総司と申します。よろしく願います」

山之辺が礼儀正しく挨拶をすると、クリリンは不思議そうな顔をした。

「…？なんか…名前を聞いたことがあるような気がするよ」

「…？」

第7話 心拍上昇中

「有名なのは俺じゃありません」

山之辺がそう言った。クリリンが「何のこと？」って顔で俺を見た。仕方が無いから補足してやる。

「今年はいいつ以外にも前島ってやつが入ってきたんですよ。前島由浅ってやつが」

すると、クリリンはちょっと考えるような顔つきをした。

「前島…って、貝掛の双子か？」

「さすが顧問！知ってたんですね」

「まあね」

クリリンはあくまで軽い乗りで答えたが、まだ少し何か考えているようだった。

「…まだ…仕事っすか」

俺が聞くと、クリリンは我に返って、それからしかめっ面になった。

「ま、いろいろとねえ…。手伝ってもらわねえにもイカンしねえ」

「じゃ、邪魔しないうちに帰ります。早く時間作って稽古に顔出してくださいね」

「ハイハイ、ま、期待しないで」

「待ってますよ」

俺はそう言っただけで教官室から出た。出口で直立不動の山之辺を促して歩く。

「4月入ってからコッチ、まだ来たこと無いけどあれが顧問のクリリン。頼りなさそうに見えるけど、実は頼りになるから」

「…ハイ」

「お前さ、本当に喋らないなあ。なんか話せよ」

俺がそう言つと、山之辺は恥ずかしそうに顔を赤くして、頭を掻いた。

「話すの…苦手で…」

それだけ言うのがやっとのようだ。由浅に手を出すなどかなんとか言っただけの勢いはどこへ行ったんだと思うと笑えるが、もじもじしている山之辺を見るのもカワイイといえればカワイイ。

「お前、いつもどつやって帰ってんの？」

「…自転車で…」

「じゃ、途中まで一緒に行くか？」

「…お願いします…」

そんな感じで、繋がらない会話を交わす。

…なんか…山之辺って、思ってたのと違うかも知れない。

日曜日、由浅と近所のコンビニで待ち合わせをした。

「こんにちわ〜」

私服の由浅は、男女の見分けがつかず、いつもの「不思議な感覚」が一層増す。由紀ちゃんの前姿も見てみたいなどと考えた。

いつものように山之辺が監視していたなら、またここで由浅にもちよつかいを出すフリをして遊べるのにな〜なんて思ったりもして…。

コンビニから俺の家まで歩いて行って、リビングに通した。母さんがジュースを持ってやってくる。

「いいよ〜、買ってきたから」

「何言ってるのよ、挨拶くらいさせてよ」

そんなやりとりをしていると、由浅が笑った。

「お邪魔してます、お構いなく」

由浅の笑顔に母さんはメロメロだ。

「かわいい子ねえ！アンタもこんなふうに育ったら良かったのにな
え」

「ああもううるさいなあ！」

母さんを追い出し、由浅に謝る。

「ごめんなく、でしゃばりで」

「いえいえ…確かお母さんも剣道されてましたよね」

お、きたな。剣道オタクめ。

…そうなのだ、俺の両親は警察官で、それぞれ剣道をしている。

「お前は剣道のこととなると本当になんでも知ってるなあ」

俺はちよつとあきれて笑った。

「ふふふ。先輩こそ」

由浅の笑みは、なんだか怪しい雰囲気で。

「いや、俺は本当にそんな詳しくないだつて。たまたま由浅が見た
いものが家にあるっただけで」

そう答えながら、俺はなんとなくドキドキしていた。

「そついや今日は山之辺とか由紀ちゃんとかは？」

妙な雰囲気を払うべく、別な質問をぶつけてみる。

「由紀は…確か友達と遊びに行ってます。その子ももう少ししたら
剣道部に入ってくると思いますよ」

「お、ナイス情報。それって可愛い子？」

俺が嬉しそつに聞くと、由浅は露骨に嫌そつな顔をした。

「可愛いかどうかは…僕からどうこつ言えませんが」
そつ言つてから、付け足した。

「先輩、由紀を誘つたそつじゃないですか」

俺はニヤツと笑つて言つた。

「誘つた、つていうか…実際は会つたびにお茶に誘つてるけど、全
く相手にされないの。兄貴から何かアドバイスない？」

由浅は少し考えて答えた。

「由紀は堅い所があるんでねえ、そつやって他の女の子が可愛いと
かどつとか人前で言つてるうちはなびきませんよ。多分」

「あはは、そつか。じゃあもつちよつと本腰入れてみるかな」

「…本気ですか？」

由浅が心配そつな顔をする。兄貴の顔だ。

「…顔はタイプ。性格は知らないから、もう少しいろいろ知りたい…ってとこかな」

「…顔はタイプなんですか…」

由浅が更に複雑そうな顔をしている。それを見ていると、山之辺の似たような顔を思いだした。

「お前ら、面白いな」

「え？」

急にそう言った俺に、由浅が怪訝な顔をした。

「俺がお前と仲良さそうにしていると山之辺が心配するし、俺が由紀ちゃんにちょっかい出そうとするとお前が心配するし」

「…いえ、僕は別に由紀の心配はしてないですよ」

由浅がそう言っつて、何か思い出したように笑った。

「由紀、なんか好きな奴がいたと思うんですよ…でも先輩が頑張るんだっつたら、それも見ものかな」

「え？ そうなの？ 由紀ちゃん好きな奴いるんだ…」

おお、ちよつとシヨツクだ。

「そりやいますよ、高校生なんだから」

由浅が当たり前みたいな顔をして笑う。

「まさか、付き合つてるとか…」

「いや、付き合つてる奴はいないと思いますよ」

「そっか」

俺はホツと胸を撫で下ろした。

…っていうかさ、俺、思ったより由紀ちゃんに嵌まってないかもつとテキトーな気持ちだったのに、今ちよつと焦つてる。

そう思つて由浅を見ると、余裕の表情でニコニコしていた。その様子が、いつも俺をはぐらかす由紀ちゃんの姿と、なんとなく重なる。

…ちよつ。。

こいつはこいつで、やっぱり可愛いし。

…そうか、由浅の方が、由紀ちゃんより色気があるんだ。

本当に変な双子…。

第8話 謎

4月後半になると、新入生の入部も落ち着いた。

今年は男子が8名と女子5名。ま、ぼちぼちというところだ。

由浅が言っていた「由紀ちゃんのお友達」も入部してきた。横山華江といって…可愛いかどうかはさておき、なんだか雰囲気は「みんなのお姉さん」という感じだ。姉御っていうか…。体格は普通だが、妙なオーラが出ているのだ。逆らいがたい、というわけでもないのに、その場を決定してしまうような雰囲気だ。

正直苦手。

でも由紀ちゃんとはクラスも一緒に仲良しで、最近部室に来る時なんかも必ず一緒にいる。

…由紀ちゃんゲットに向けて、またまた障害が発生したような気がする…。

障害といえば、佐々木先輩もどうも由紀ちゃんを狙っているような気がするのだ。

彼女がいるくせに…全く油断ならない。

俺の春はいつ来るのだろう…。

恋愛に関してはうまくいってない俺だが、剣道に関しては好調をキープしていた。

由浅が入ってきて、張り合いが出てきたことが一番の原因だと思う。

…俺って恋よりもライバルの存在で伸びるタイプ？ははは…。

ま、俺だけじゃなくて、新入部員の存在が2、3年生のやる気を引き出していることは確かなのだ。

それに最近は仕事が落ち着いたのか、クリリンも稽古に参加するようになった。体力なさそうに見えてもやっぱりすごくて、俺も技

を軽く払われただけで身体が浮きそうになることがある。

そうなる注目は由浅だ…。俺だけじゃない、誰もが由浅とクリリンの稽古を楽しみにしているのだが…。

何故か二人のタイミングが合わず、まだ一度も稽古をしていないのだ。由浅が委員会で遅れてきたり、クリリンが教員会議で早く抜けたり…。誰かの陰謀かと思ってしまうほどなのだった。

「早く栗林先生と稽古がしたいなあ」

今日もクリリンと『すれ違った』由浅が、男子部室でこぼしている。

「そのうち嫌っていうほど稽古できるよ」

高橋がそう言って由浅の肩をポンポンと叩く。

「はい」

肩を落として着替え始める由浅を見ると、ちょっとかわいそうに思うが、高橋の言うとおり、『すぐに』『いくらでも』『稽古できるようになるだろう。』

「クリリンも楽しみにしてるぜ、きっと。由浅の名前知ってたし」
佐々木先輩も励ましている。

最近、由浅にみんなが注目しているのを感じる。実力があるから…だけじゃない。他人を惹きつける何かを、由浅は持っている。多分由紀ちゃんにも無い何か…。

誰かに媚びるでもないのに、その様子を見ていたくなるのだ。素直だから？見た目が小動物っぽいから？…なんだろうか。こういうのもカリスマっていつのかな…。

もしも、もしも山之辺が本当に由浅に惚れているとしたら…：ちょっとかわいそうだなと俺は思った。あんなに目立って、皆に愛されて、俺だったら気が気じゃないだろう。どこかに閉じ込めておきたくなるだろう。

そう考えると…側で黙って見ている山之辺はちょっと偉いかも。

でもその『側で黙って』の度合いが酷いか、あいつの場合。

「山之辺と由浅って…」

5月に入ったある日、教官室で俺はポツリとつぶやいた。本当に何の気なしに、その時思っていたことが偶然口から飛び出したのだ。高橋が部活を休んでいて、代わりに鍵を返しに来た時だった。「どうしたんだ？」

俺に背を向けて仕事をしていたクリリンが、椅子ごと振り返った。

「…え？俺、なんか言いました？」

「言ったよ『山之辺と由浅』がどーのって。何か気になるの？」

「いや、なんであんなにベツタリなのかなと思って…」

正直に答えると、クリリンはちよつと考えるような仕草をして、それから言った。

「阪中、その件だけど…しばらく様子見てやる…っていつか…そつとしておいてあげてくれないかな」

「…え？」

俺は驚いた。稽古にもほとんど来ていないクリリンが、あの二人のことで何か意見してくるとは思ってもみなかったからだ。

「…何か知ってるんですか？」

俺は訊いてみたが、クリリンはそれには答えなかった。

「…4月に山之辺とちよつとぶつかつたって聞いているよ」

「それは…」

俺は言葉に詰まったが、クリリンは構わず続けた。

「阪中が正しいんだらうなって思うよ。俺は前島と山之辺がどれくらい『ご一緒』してるか見てないけど、ちよつと異様だと他の先生からも聞いているし…」

「じゃあどうして」

「…まあ、とにかくもうちよつとだけ…様子をみてやって…」

珍しくはぐらかすようなクリリンの態度に、俺は正直苛立った。生徒と同じ目線でなんでも話してくれていたのに。

「理由を聞かなきゃ納得できませんよ」

「…そう言うと思ったから今まで黙ってたんだけどな」
クリリンはそう言って大きなため息をついた。

「時期がきたら話す、それじゃ駄目かな」

「……」

全く納得できなかった。

でも、クリリンがこんなふうをお願いをしてくることも珍しい。俺は言葉を失った。

何だろう？先生や学校を巻き込むような何かがあったのか？

由浅を軸にして、俺の中で「不思議に思うこと」が積み重なっていく気がする。

なのに由浅本人は全く屈託のない様子で俺になついているのだ。

第9話 合宿初日

朝6時半。高校グラウンド隅の宿泊棟に、少しずつメンバーが集まりだした。

今日から3日間、合宿。

ゴールデンウィーク中なので、毎年参加は結構自由。今年も参加者は半数だ。

「おはようございます！」

よく通る声で遠くから叫んでいるのは由浅だ。後ろに山之辺がデカイ図体で番犬のように歩いている。更にその後ろから…控えめな様子で由紀ちゃんが歩いてくる。…かわいい。

「由紀ちゃんマジかわいい」

思わずつぶやいたら、高橋が俺の耳元で囁いた。

「佐々木先輩も狙ってるぞ」

俺は眉をひそめて囁き返す。

「そうなんだよな。でも俺の方がいいと思わねえ？」

「…俺はお前のこと知ってるから分かってるけど、お前は評判悪いからなあ」

…そうなのだ。

なぜか俺は『遊んでる』というレッテルを貼られてしまっているのだ。

「なんでかなあ」

俺が首をひねると、高橋は俺の後ろ頭を叩いた。

「誰にでも気安く声掛けるからだろうが。今度遊ぼう？とか」

「あんなの、挨拶だろ？ホントに遊びに行ったりしないぜ」

「それぞれ、その気にさせて、告白されたら断るだろ。断られた方は恨むぞ」

高橋の言い草に反論しようとした時、クリリンが現れた。

「おはようー!」

「おはようございます!」

みんなが口々に挨拶をする。

そつだ、今日こそクリリンと由浅の稽古が拝めるぞ。

と、その前に、俺も稽古をつけてもらわねば。ちよつとこころ3日本当の意味で「フットワークが良く」て身体が軽い。今日こそクリリンから完璧な面を一本奪いたい。

クリリンが宿泊棟の鍵を開け、みんながゾロゾロと中へ入っていく。

入ってすぐはホールになっている。そこにみんなが荷物を一旦置いて、クリリンの周りに輪になった。

「おはようございます。今日から合宿ですが、まだ5月で朝夕は寒くなります。風邪を引かないように気をつけて、しつかり稽古に励んでください。明日は東高校の下山先生と、貝掛高校の春日先生がいらっしやいます。お二人を飽きさせないように、次々稽古を申し込むように!」

後半はちよつと笑いながら話している。楽しそつだ。

「部屋割りは昨日部長から配ってもらつた通りです。消灯は11時とします。以上です。よろしくお願いします」

『よろしくお願いします!』

みんなの声が揃つて、それから一旦解散した。7時半までに着替えて道場に集合だ。

男子の部屋割りは、大広間に雑魚寝。「部屋割り」とは言えない。

俺は適当に隅つこの方にカバンを放り投げて、とりあえず寝そべつた。

「朝早いと眠いな」

そつ言つて、みんなが次々にゴロゴロと寝転がる。お約束の光景だ。

山之辺だけが入り口付近で三角座りをしている。その側に由浅がゴロゴロしているのが見えた。

山之辺…本当に由浅のことが好きなのかもな…。そういう感情ってよく分らないけど、今すごく優しい顔してる。こっちまで穏やかな気持ちになってしまいうくらい…。

からかって悪かった…かな。

でも、クリリンの言ったことも気になるんだよな。

…何があっただろう。

クリリンがそつとしておけと言ったのだからそつとしておいたほうがいいのだろう。

でも、理由を聞かされていない俺がその忠告を素直に受け入れる義務があるだろうか。

「山之辺ッッ！」

俺は突然立ち上がって、山之辺の方へと走った。

「お前も寝ろ！」

全身でタツクルして山之辺を倒した。

「わっ！阪中先輩何するんですか！」

案の定、山之辺は驚いてちよつと怒って起き上がろうとした。俺はさらに体重をかけて起き上がらせない。

山之辺の方が身体が大きいので、…つい本気になりすぎた。

「ちよ…ちよつと…苦しい…！」

スリーパーホールドが決まって山之辺が「落ち」かけた。

「あ、ごめん！」

慌てて身体を離すと、山之辺は咳き込んで、大きく肩で息をついた。ついて、それから…。

俺に四の字固めをかけてきた。まさか山之辺から技を返してくるとは思わず油断したせいで、キレイに決められてしまった。

「痛ッテえ〜！山之辺、すまん、ギブギブギブ…！」

「は、やっぱり山之辺は身体デカイから特だ」

解放され、大の字になって天井を見る。

「でも部屋のドアで頭打ちますよ……」

山之辺の、その言葉に驚いた。

…ふふ、冗談言うようになったのか。

ニヤツと笑って奴を見たら、疲れた表情で目を閉じて横たわっていた。

第10話 初稽古

そんなこんなで始まった合宿の、初日のメインイベントはクリリンと由浅の直接対決だった。

それは、稽古の最後の最後にやってきて、全員の稽古の手を止めさせた。

…みんなが固唾を飲んで見守った。

「お願いします！」

と、由浅が頭を下げ、クリリンが小さく頷いた。俺は、自分の本番の試合のように緊張してくるのを感じた。

構える2人…。

ビリビリとした空気に、道場が静まり返る。

「さあ来い！」

クリリンの太い声が響き渡った瞬間、由浅の身体が跳んだ！

「面ッ…!!!」

その時の、クリリンの動きは…初めて俺が由浅の面をかわした時と似ていたんじゃないかと思う。

離れた場所から間合いを詰めずにいきなり技が飛び込んで来た驚き。

そして、稽古を積んだ結果として、身体が勝手にそれをかわしたようなギリギリの防御。

でもやっぱりクリリンはクリリンだ。

「面ツツ!!!」

防御だけで終わった俺とは違い、かわしたその踏み込みで由浅に一撃を喰らわせた。

そしてそれは由浅から綺麗に一本を奪った。

数秒の空白。

「ファイトオツ!!」

佐々木先輩の激が飛んだ。

それをきっかけに、部員全員が由浅を応援し始めた。

もちろん俺も。

由浅の剣道は、こうして見ると本当に素直だ。

駆け引きが無い。

稽古をつけてもらう相手に対して、持てる技の全てをぶつけていく。

小賢しい間合いを取って、息を整えることもしない。

だからといって、無茶苦茶に竹刀を振り回しているわけでもない。

一つ一つが丁寧であることに変わりはない。

いずれか一本取ってやりたいという深い深い欲も垣間見える。
そこが素直さとのギャップで…正直なところ、俺も由浅という人間をもっと知りたくなるのだ。

ちらりと山之辺を見る。

面の奥の表情は、全く見えなかった。

大広間に布団をぎゅう詰めに並べて、適当に寝転がる。

「あゝ、疲れた〜」

高橋が、なんとなくな感じで俺の横の布団に寝転がった。

「明日下山先生と春日先生が来るなあゝ、阪中、早めに稽古行く？」

「そうだな、ちょっと身体あつたまつてからにする。ラストは避けたいな」

なんて、軽く相談事。

稽古をつけてもらうとき、一番最初に行くのは度胸はいるが意外とラクだ。先生も身体が乗ってきていないので、結構あっさり終わるのだ。ラストは、体力のあらん限り…って感じになるので、正直しんどい。

…もちろん思った通りの順に稽古をつけてもらえとは限らないのだが、つついしシュミレーションなどしてしまう。

1年生が風呂に行くと、みんな口々に話し始めた。

「今日の由浅の稽古は面白かったな〜」

「けどさ、さすがクリリンって感じだったよな」

みんな似たようなことを思ったようだ。

しかし…俺の感じているような、あの不思議な感覚を、他の者は感じているのだろうか。

それとも、俺の「由浅のことを知りたい」という感情は、単に由

紀ちゃんと似ているから？

…いや、多分…山之辺に言われた言葉が、俺に由浅を過剰に意識させているだけなのだろう。

それにしても2人の過去に何があった？

そんな俺の疑問のヒントは意外なところに転がっていた。
というか…盗み聞き？

2日目の稽古の後、下山、春日、クリリンの3人が話しているのを偶然聞いてしまったのだった。

第11話 窓の外

2日目の稽古は夕食後も続き、午後8時に終了した。

俺と高橋はシャワーを浴びた後、宿泊棟の周りをウロウロしていた。男子大部屋はプライバシーが無く内緒話もできないし、ちよつと息抜きのつもりだった。

「それで阪中は由紀ちゃんとなんか進展あったわけ？」
なんて、痛いところを突いてくる高橋に

「……無い…今日は稽古した…」
と返事をしたら、笑いやがった。

「稽古ぐらい俺もやってるぞ」

「うーん…なんか由紀ちゃん、はぐらかし上手なんだよな」

「かわいいからな、『はぐらかし慣れ』してるんじゃないの？」

俺が力無くハハハと笑うと、高橋が

「お前つてさ、由紀ちゃんより由浅と仲良くなってねえ？」
などと言う。

「そうなんだよな。それで山之辺にすごい睨まれてさ」

「ははは、山之辺、由浅好きだよなあ…」

丁度そんなふうに、話題が「由浅&山之辺」に移った時だった。

「栗林先生ところ、今年もいいのが入ってきましたねえ」

そんな声が聞こえてきた。ハツとなつて辺りを見回すと、俺たちは先生が控え室に使っている部屋の窓の下にいた。

「前嶋兄妹が揃って来るなんて羨ましいなあ」

由浅と由紀ちゃんの話…

俺は高橋に目配せをした。高橋も興味深々といった表情で頷き、それから2人で黙って窓の外に張り付いた。

「それにしても栗林先生、あの子でしょう？10年前の事件の子…」

「あの時は騒ぎでしたねえ」

「うちの子は年が近くてね、もう震え上がりましたよ」
俺と高橋は目を見合わせた。

…事件？10年前？…

「そうですね…でもその件はみんなもう忘れかけているし、本人たちも触れて欲しくないでしょうから僕もあまり意識しないでいるんですけどね」

落ち着いたクリリンの声。

それでその話題は途切れた。

あとは部員に対する評価とか…俺のことも褒めてくれていたが、普段なら嬉しい話も、そのときはそれどころじゃなかった。

しばらく聞いていても、全く元の話に戻りそうになかったので、俺と高橋はまた合図し合って、そつとその場を離れた。

「なんだろう、10年前の事件って」

部屋に戻りながら、高橋が聞いてきた。

俺は、その10年前の事件こそが、由浅と山之辺の「何か」だと思っただ。それは、クリリンの「話を終わらせる」口調が、この前俺に「そつとしておけ」と頼んだ時の様子と似ていたからだ。

「なあ、高橋…」

俺は宿泊棟の入り口で足を止めると、周りを見回し、誰もいないのを確かめた。

そして、合宿前のクリリンとの会話を話した。

「なんかさ、さっきの先生達への態度から見ても…」

「…そうだな…」

高橋も機転の利くヤツだ。ウンウンと小さく頷いて言った。

「今日聞いた話は、他の奴らには内緒だな」

今度は俺が頷いた。

部屋に戻る途中、由紀ちゃんと横山が歩いてくるのとすれ違った。シャワーを浴びた後だったらしく、2人ともタオルを拡げて肩にかけ、濡れた髪を風に晒していた。由紀ちゃんは、いつもは髪をひとまとめにしているので、その様子はとても新鮮だった。

白い頬が上気している。俺と高橋に会釈した時、フワリと笑うような表情になった。

一緒に去っていく女の横山が異様に羨ましい。俺も並んで歩きたい…。

…ジャージ姿で、なんであんなにかわいいんだ…!!!

『事件』のこともしばし忘れて廊下で悶絶している俺を、高橋がヤレヤレとため息交じりで引きずっていく。

「お前、マジなんだな」

「そうともさ…お前も信じてなかったのか？」

「いつもの冷やかしだと思ってた」

失礼な。

「…だいたい…あんなにかわいいのに、お前はなんとも思わないのか！」

「いや、かわいいとは思っけどさ、お前が思った以上にメロメロ過ぎて正直引くわ…」

ゴールデンウィークの合宿が終わり自宅に帰った俺は、早速ネットですべて事件のことを調べてみた。

西暦、この辺りの地名、それから「事件」の文字を入力し、検索にかけてみた。

……。

5歳児相手の、誘拐未遂事件がヒットした。

第12話 過去

数学の授業中、ぼんやり窓の外を見ていたら、でっかい山之辺の姿が目にとまった。

…おや?…

体操服姿。デカいせいか似合わね〜。

ばらばらに、1年生らしき奴らの姿が増えてきて…。

やっぱり。山之辺の近くに由浅がいる。っつーか、由浅の周りを山之辺がウロウロと護衛のようにウロついている。

体育教師小柳も最後の方に付いてきた。バスケットボールをいくつか抱えている。しばらくすると、スリーオンスリーが始まった。さすがに山之辺&由浅もチームまでは違うようだ。山之辺はプレイしているが、由浅は日陰で他の同級生達と座って見学している。

……。

山之辺、背はでかいが運動神経は微妙だな。前から思ってたけど。他人に劣るとまでいかないが、優れているとも言えない。ただその身長を利用して、得点だけは重ねている。

ずっと見ていたわけではないので、山之辺のグループが勝ったかどうかは分からなかった。

由浅は、身体は小さいが、運動神経は抜群ではないかと思う。剣道以外のスポーツでも、いい動きを見せるんじゃないか…。

ちよつと楽しみだと思つて待つていたら、由浅がプレイする前にチャイムが鳴ってしまった。

…残念!

ゴールデンウィーク明けの月曜日、高橋と顔を合わせた俺は、高橋がネットで俺と同じ情報を得たことを感じた。

そしてお互い、その話はせず、山之辺と由浅のことにも触れず黙っていた。

公園で遊んでいた5歳児が、変質者に連れて行かれそうになる。一緒に遊んでいた子どもたちのうちの1人が気付いて大声を上げた。

近くに子ども達の親がいて追いかけて、変質者は子どもを置いて逃げた。

皆に顔を見られた犯人は、数日後に捕まる。

半年以上も前から、その子どもを狙っていたことが判明する。

…由浅だ。

今でも子どもらしい可愛らしさが残っている。

5歳の時なら、なおさらだろう。

由紀ちゃんファンを自称する俺だが、正直なところ、独特の雰囲気は由紀ちゃんよりも由浅の方がはるかに上回ることも感じている。顔がカワイイとかいう以前の、特別な何か…。全くの他人の目を惹きつける何か…。

そしてこの、異変に気付いた子ども、というのが山之辺ではないだろうか。

『阪中先輩の由浅を見る目は信用できません』

そう言い切った、山之辺の姿が目には浮かぶ。あれは、そんな過去があつての発言だったのだ。

心配で心配で仕方がないだろう。

そして、そんな事件があつて、周囲も2人に気を遣っている…。10年たつても気を遣い続けるのは、10年たつても由浅が誘拐に値するだけのオーラを放っているからなのか…。

高橋と、そんな話をしてみたくないわけではないが、あまりにデリケートな話だけに、お互いに少々ビビッてしまって、時々目を見合わせるだけだ。

確かにクリリンの言った通り「そつとしておいた方がいい」のかも知れない。

でも、俺はなんだか引つかかる。

由浅はもう、保護など必要としない。関東大会で優勝するくらいなのだから。

見た目だけの判断は、もう不要だと思う。

山之辺のやっていることは過保護だと、由浅も思っているはずだ。…そうだ、事件から立ち直っていないのは連れ去られそうになつた由浅よりも、それを目撃してしまった山之辺の方なのだろう。由浅を護衛しなくてはならないと、強迫観念のように感じているに違

いない。そして由浅もそんな山之辺を許している。

事件のことを知って、俺にとっては却って疑問が増えてしまった。

第13話 抜け駆け？

ゴールデンウィーク明けすぐは中間テスト準備のため、部活動は一旦休憩となる。

一応進学校のうちの高校は、試験前10日間は部活を差し控えることになっているのだ。

そんなこんなで、俺は放課後、高橋と一緒にマクドナルドでダラッとして過ごすのだった。…勉強しろよと自分でも思うが。

2年生は一番ダレやすい学年…じゃないかな。1年生は入学以来初めての定期テストで気合が入っているし、3年生は目前に受験の影がチラついてきていて勉強せざるを得ない。

「だるいな〜、2年は試験無かつたらいいのに」

思わず口にしたら、高橋が笑って同意した。

「やる気全く出ないしな〜…あッ！」

突然高橋が立ち上り、身を乗り出すようにして窓の外を見た。

「どうした？」

「あれ、あれ…」

高橋が指差す先…。

「わあッ！！！！」

俺の方が、もっとずっと大きな声を出してしまった。

なんでだなんてだなんてだ！？

大通りの向こう、由紀ちゃんが歩いている…佐々木先輩と。

「しまった〜！！！！」

俺は恥も外聞も無く大声で叫んでしまった。そのまま机に突っ伏した。

「や、やられた〜…」

思いつきり凹んでいると、高橋が俺の肩を叩いた。

「いや、まだ負けと決まったワケじゃなさそうだが。手を繋いでいるわけでもないし、たまたま出会って駅まで歩いているだけかも知れない」

そ、そ、そうだよな…。

俺は恐る恐る顔を上げて2人の様子を見た。

うーん、そう言われればそんなふうにも見えるし…いや、付き合い始めの、ちょいヨソヨソしい感じにも見える。

しかしとにかく、わざわざ稽古の無い日に一緒に歩いているっていうのは、ちよつと気にかかる。

由浅の件に気を取られるあまり、肝心の由紀ちゃんのチェックを忘れていた…。

クソ、佐々木の奴…受験生の癖に…。

いや、その前に彼女いるんじゃないのか？

「たかはし〜！」

思わず泣きつくと

「どうした、お前らしくもない。まだまだこれからだろ？」

と、高橋は俺の肩を叩いて励ました。

か、かつこいいぞ、高橋！

っていつかなんていつか、頑張れ、俺！

店から飛び出して、後をつけたいのはやまやまだったが、高橋にやめとけと言われた。

「それって超恥ずかしい」
とのこと。

「阪中ってさ〜、実は恋愛慣れしてないよな…」
とまで言われた。

しかし、そうなのだ。実際には。

軽口で女子と話しているし、それで誤解を招きよく告られたりするわけだが、実のところ、自分が誰か好きになって、振り向かせようと努力して…ということがこれまで無かったかもしれない。それも、あんなに「相手にされない」のは初めてで…。
くっッ！どうしたらいいんだ！

勉強どころじゃない。

いや、そもそも勉強しなかったんだけどさ…。

高橋の助言では「オマエの情報網を存分に使え!」、つまり、とりあえず由浅に探りを入れろ、ということだった。

それはそれで気が引けるのだが、ここは仕方が無い…。

俺は思い切って由浅に電話してみることにした。

携帯の発信ボタンを押す時、初めて好きな子に電話した時みたいに緊張した。

…あれは中学の時。

あの頃は携帯なんて持たされてなくて、相手の子も持ってなくて家に電話した。

おばちゃんが出て、それはそれでドキドキしたりして…。

なんて、思い出している場合では無い。

そもそも、由浅に電話するのに緊張などする必要はないのだが、やっぱり同じ顔だけに、思い出すとちょっとドキドキしてしまう…気がするのだ。

『はい、先輩?』

素直で良く通る、由浅の声が聞こえてきた。

「ごめん、すぐくくだらない電話なんだけど」

『もしかして、由紀のことですか？』

即答。相変わらず察しが良い、と思つたら

『今日、佐々木先輩と駅前歩いてた件でしょ？先輩で3人目ですよ、確認の電話』

なんて言う。何ッ！

「3人!？」

『ええ、あ、剣道部員じゃありませんよ、同級生からですけど』

…やっぱ、人気あるよな、仕方ない。掃き溜めにツルのような可愛らしさだ。

『それがね、先輩には嫌な情報ですけど、実はまだ帰ってきてないんですよ』

ちらりと時計を見る。まだ5時だ。

『まだ夕方ですし、心配することないんですけど、なんか分かつたらメールか電話しますよ』

「ああ、すまん」

ちよつと凹んでいると、由浅が言った。

『佐々木先輩とは付き合つたりしないと思いますよ、由紀』

「…なんで？」

『ああいうゴツい系の人、タイプじゃないと思います』
ぷっ！

あまりにズバリな言い様に、つい笑ってしまった。

「ありがとう。その言葉信じるよ」

俺はそう言つて電話を切つた。

やっぱり由浅と喋ると元気出るよな〜って思う。

頭が良いんだろうな、言葉がポンポン飛び出すし、ストレートに話すし、なのに悪意を感じなくて、正直羨ましいくらいだ。

どうやったらあんなふうに育つんだろう、由紀ちゃんとももつと喋ってみたい…なんて、思ってしまうのだった。

そして俺はちよつとぶっきれて、でも少しドキドキしながら、
由
浅の次の連絡を待つのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4983a/>

ルール違反

2010年10月11日01時42分発行